

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2012年 7月 20日

派遣者氏名（専門分野）	合山 林太郎	（日本文学）
-------------	--------	--------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	中国における日本漢文学研究の動向について—域外漢籍研究の現在
-------	--------------------------------

派遣期間

2012年3月23日～ 2012年5月25日(5月10日～13日まで停止)

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	中国	南京	南京大学・域外漢籍研究所	張伯偉 教授
	同	上海	上海図書館ほか	
	同	北京	国家図書館、同古籍部ほか	

派遣先で実施した研究内容

中国南京市の南京大学域外漢籍研究所を拠点に、南京、上海、蘇州、北京各地域の図書館や研究機関、史跡を訪問し、以下の学術調査を行った。

張伯偉教授、卞東波講師、童嶺講師をはじめとする南京大学域外漢籍研究所の先生方と面談し、中国における域外漢籍研究の状況について示教を得た。また、同大の大学院生と交流し、中国文学に関する情報検索やデータベースの利用に関して意見交換を行った。

南京大学域外漢籍研究所所蔵の日本、朝鮮、琉球、越南の漢文学に関する基礎文献及び学術雑誌を閲覧し、重要と思われる論文について記録・複写した。同研究所発刊の東アジア漢文学関係の研究書や書目を閲読し、有用な情報を得た。

張伯偉教授の講演「杜甫在東亜文学史上的地位」（南京大学110周年校慶紀年講座、2012年5月5日）をはじめ、南京大学百十周年を記念する中文系主催の複数の講演を聴講した。

「南京大学域外漢籍研究所・学術沙龍 東亜漢籍的研究方法」（同5月6日）に参加し、発表を行うとともに、中国の大学に在籍する中国、韓国の研究者の発表を聞き、朝鮮、日本を含む東アジア漢文学研究の手法について議論した。

南京図書館、北京・国家図書館及び同・古籍部、上海図書館において、中国清代の詩文集及び地方志、逐次刊行物、工具書などを閲覧した。また、晩清の新聞雑誌の文献調査を行い、明治期日本の文化動向と関連のある記事を抄出した。

とくに上海図書館において行った『遊戯報』をはじめとする多くの晩清の新聞雑誌を閲覧・複写や、展示「近代中文第一報—紀念《申報》創刊140周年文献展」の見学から、多くの知見を得た。なお、北京の第一歴史檔案館においては、予定していた呉汝綸関係の資料を利用することはできなかったが（電子化作業中のため）、所蔵目録をはじめ、調査可能な目録及びデータベースを閲覧した。

このほか、南京の秦淮、上海の外灘や虹口、蘇州の山塘街など、永井禾原ら明治期日本の漢詩人と関連の深い史跡を訪問し、彼らが制作した詩文の解釈に必要な情報を得た。

なお、調査の過程で知り得た日本漢文学及び晩清関係の研究書・資料のうち、約 150 冊を購入し、大阪大学附属図書館へ寄贈した。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

本研究は、現在の中国（中国文学）における中国以外の地域の漢文学研究の動向を知り、日本文学領域における漢文学研究との比較を行い、今後、目指すべき学問の方向性について考察すること（①）、また、19 世紀後半を中心に、清と日本との間の文化交流について資料を収集し、研究の新視点を見出すこと（②）の 2 点を主要な調査目的としていたが、これらの課題について、一定の見通しを得ることができた。

まず、①についてであるが、南京大学の域外漢籍研究所では、日本、朝鮮をはじめとする東アジアの諸地域・国家の漢詩文に関する研究を包括的に行なっており、その研究成果は、同研究所が刊行する学術雑誌『域外漢籍研究』などに発表されている。同大中文系が発刊する学術雑誌『中国詩学』には、90 年代においてすでに「比較文学」の項目が設けられており、こうした関心が継続し、近年大きく発展したものと理解される。

域外漢籍研究における考察方法は、日本文学における漢文学研究のそれと違う部分も多くあり、たとえば、中国詩学の影響を考える場合、朝鮮と日本とを比較するなど、広域で分析することがしばしば行われている。こうした研究手法は、中国との対比のなかで日本漢文学の特性を分析してきた日本文学領域の研究にはない視点であり、吸収する必要がある。

なお、域外漢籍研究では、研究情報が、各国の中国文学研究者を通じて蓄積されており、日本文学領域での業績は、中国語への翻訳がなされた一部の図書・論文を除いて、十分に紹介されていない。日本文学の側からの海外への情報発信が必要であることも痛感した。

次に②に関しては、19 世紀後半の上海において刊行された雑誌に、日清間の漢文学とのつながりを読み取れる記事を発見することができた。たとえば、中国側の雑誌に、近世日本の漢文作品が掲載されているなどのことがある。渡清した岸田吟香らを媒介とする晩清の上海文壇と明治初期の東京漢詩壇との間の交流についてはすでに知られているが、作品の形式や内容などのより深い次元で、上海の文壇を日本の漢詩世界に影響を与えていた可能性がある。今後、追加の調査を続け、日本漢文学作品に新たな評価・意味付けを与える契機としたい。

また、中国における、晩清の新聞ジャーナリズムの動向や西洋学術の翻訳状況に関する研究は、ここ数年で大きく進展している。これらの研究成果を知り、近代日中の比較文化の考察について構想を持ち得たことも、今回の研究の一つの大きな成果であった。

派遣後の研究発表の予定

すでに、前述の「学術沙龍 東亜漢籍的研究方法」において、「在日本的江戸漢詩研究史—以日本文学、比較文学的研究成果為論述中心」という題で口頭発表（中国語）を行い、1945 年以降の日本における江戸時代の漢文学研究の動向について、日本文学及び比較文学における業績を中心に紹介した。この報告は、中国文学領域以外の日本の漢詩文研究が、中国側には十分伝えられていないという、研究期間中に抱いた問題意識に基づいて行ったものである。

今後は、漢文学を媒介とした晩清中国と明治日本との交流について、学会発表などを行うとともに、今回の調査で得た中国の漢文学研究の動向についての知見を織り込みつつ、自身の幕末・明治期の漢文学に関する研究を進める予定である。